I　マルクス主義とレイシズム

【セッション報告】

世話人：　隅田聡一郎（オルデンブルク大学）

報告者：　マーク・ウィンチェスター（国立アイヌ民族博物館）、梁英聖（一橋大学）、隅田聡一郎

討論者：　酒井隆史（大阪府立大学）

参加者　22名

　近年のアメリカ合衆国を中心とするブラック・ライヴズ・マター運動の広がりは、その理論的支柱とも言えるブラック・マルキシズムの「レイシャル・キャピタリズム」論をはじめとして、マルクス主義的なレイシズム論を再考するよう私たちに迫っている。従来のレイシズム（というよりも正確にはナショナリズム）に関するマルクス主義的なアプローチは、1988年にフランスで刊行されたウォーラーステインとバリバールの共著『人種・国民・階級』を画期として、ポストコロニアリズムやポスト構造主義理論に影響を受けた研究者たちによって、経済還元主義あるいは階級中心主義と批判されてきた。この動きと前後して、イギリスにおいてもマイルズやホールなどが、グラムシやアルチュセールのネオ・マルクス主義的な概念（ヘゲモニー、イデオロギー）やフーコーの概念（権力、言説）などを活用して、マルクス主義とレイシズム・スタディーズの結合を試みている。とはいえ、2000年代にはこのような試みはほとんどなされなくなり、とりわけ日本においてはマルクス主義的なレイシズム論それ自体が忘却されてしまっている。本セッションでは、このような問題意識にもとづき、それぞれの専門テーマにもとづいて各報告が行われた。

　第一報告（ウィンチェスター）は、佐々木昌雄が月刊新聞『アヌタリアイヌ われら人間』（1974年1月20日発行）に寄せた文章「今、周囲するもの」における「集団と集団、階層と階層、あるいは階級と階級が、他方を自らの膝下へひざまつかせ、争い、闘う歴史の永い時間の果てに、＜異ナル族＞は解消されるだろうか」という言葉を下敷きに、アイヌ史研究とマルクス主義理論の史学史を再検討した。マイルズやホールのレイシズム研究の影響下のもと、アイヌに対する人種差別の（非）論理の循環性を歴史的に解読するために、1990年代には、アイヌ民族による「対抗の物語」の形成過程を分析した研究が登場する（リチャード・シドル『アイヌ通史』岩波書店、原著1996年）。これはまさしく日本において、現在のアイヌに対するヘイトスピーチ（差別煽動表現）の背後にある構造的非対称性を無視した相対主義言説が、彼らの民族的アイデンティティを否定し始めた時代であった。さらに報告では、日本におけるアイヌをロマン化する和人の左翼活動やマルクス主義講座派史学の影響を受けた北海道史を批判的に検討するためには、佐々木の「非同時性の同時的存在」に依拠して、アイヌが「歴史的に異なる社会的存在」（たとえば、前近代的または非近代的な「『狩猟採集』社会の原型」など）として知覚される契機それ自体が近代という時代の力学において再現前されていることを認識する必要があるとした。

　第三報告（梁）は、全世界で猛威を振るう極右台頭が、単なるレイシズム増大ではなくボーダー（国境）の強化を道具としていることに着目し、これに対抗しうるシティズンシップ闘争とはどのようなものかという観点から、日本のレイシズムを批判するという課題を設定した。前半では、ボーダーを用いたレイシズムに対してシティズンシップ闘争による対抗を提案したバリバールの議論を出発点にして、その問題意識がメッザードラや、カナダのハーシャ・ワリアのボーダー帝国主義批判につながっていることを紹介した。また、後半では、『思想』2021年9月号掲載論文において展開した「１９５２年体制」の批判を行った。日本ではボーダーとレイシズムが、反レイシズムの不在によって、欧米ではみられないほど強化されていることを示した。

　第三報告（隅田）は、90年代以降に英米圏とならんで進展したにもかかわらず、日本ではほとんど顧みられていないドイツのマルクス主義的レイシズム批判を概観した。レイシズム研究の高まりは、それまでのナチズム研究にも大きな影響力を与えたがアドルノやホルクハイマーの批判理論を継承したマルクス主義理論もまた、いわゆる反セム主義とレイシズムの相違、ネイションとレイスの接合、構造的レイシズムと主体構築の関係（『権威主義的パーソナリティ』の批判的継承）などについて独自な展開をみせている。報告では、アルチュセールやマイルズのイデオロギー論ではなく、アドルノらのイデオロギー批判に依拠することで、「資本主義における支配形態としてのレイシズム」を明らかにし、マルクス主義のレイシズム批判をより豊かなものにするために、フーコーらの影響を受けたレイス概念の社会史を検討した。

　討論者（酒井）は、まずセッションの主題について、各報告者の報告テーマが異なりながらも、レイシズム批判における反レイシズム闘争の重要性、そしてレイシズム・スタディーズの進展と実践の乖離が日本において極めて著しいことが共通の問題意識となっていると述べた。第一報告については、佐々木の「非同時性の同時性」概念とブロッホのそれとの関係、さらにアイヌ史学において講座派史学への批判がどう位置づけられていたのか、それは現代における左派冒険主義の「忘却」との関係も含めて考える必要があるのではないかと指摘した。第二報告については、ウォーラーステインとバリバールの主題であった「階級闘争のズレ」としてのレイシズム理解が報告内容において正面から位置づけられていないのではないか疑義を呈した。第三報告については、人種間闘争と階級間闘争を連続的に把握するフーコーの方法論にマルクス主義が依拠することの危険性を、「フーコー神話」の解体にかんする近年のフーコー研究の動向をふまえながら指摘した。さらに、マルクスにおける人口言説をレイシズムとして位置づけることで、マルサスの人口論に対して打ち出された「相対的過剰人口」論まで捨て去ってしまうことにならないかと問うた。

　フロアからは、ウォーラーステインとバリバールの主題は、階級とレイスの関係のみならず、ネイションというファクターも重要であったとしたうえで、近年のフランスにおけるBLM運動の台頭をふまえながら、ネイション形態とシティズンシップの関係をどう把握するかという質問がなされた。また、人種主義をレイシズムと訳することの意義、日本のアカデミズムにおいて90年代以降、「民族差別」研究から「レイシズム」研究へシフトしていったことをどう考えるかという指摘がなされた。さらにマルクス自身の言説においてネイションとレイスがどのような位置づけにあるのか、ドイツのマルクス主義的批判理論によるレイシズム批判が今後どのような理論かつ実践的展開を見せるのかという質問もなされた。